

イスラーム経済の文化的背景

黒田 壽郎

I

これまでイスラーム経済論という主題は、さまざまな意味で人々の注意の対象となりにくい主題であった。ごく最近にいたるまでイスラームそのものも、時代遅れの、死んだ価値体系であり、現代での妥当性を欠くもの、未来への可能性をもたぬものとして論じられてきた。中東世界の民衆のイスラーム、あるいはイスラーム的伝統への固執の強度は、イラン・イスラーム革命の成就、その意外なほどの持続性によってようやく外部の観察者に自覚されるようになった、というのが偽らざる実情である。そして実際のところイスラームが、現段階でどの程度国際的舞台で通用しうるかという推論を行なうにあたっても、依然として不透明感が存在することは否めない。

この不透明さには、二つの側面が存在している。その第一は、突然うねりのように高まってきた民衆のイスラーム回帰の動きにたいして、外部の観察者が的確な判断を行なうための、十分な資料をもっていないことに基づくものである。ある種の専門家の間では、イスラームとはすでに周知の事からであり、その内実に関して十全な知識をもっていると自負するむきもあるが、これはきわめて疑わしい。イスラームとはなにか。その社会的、

文化的機能については、いまだに検討すべき未知の領域が無限に存在するはずである。¹⁾イスラームとはこのようなものと、中世的な発想でこれを説明しきって安閑としているのはむしろこの種の怠惰な専門家たちであり、その例は周囲にも数多いが、ここでは問題とすまい。

不透明さの第二の原因は、イスラーム回帰を意図する当事者たちが、いまだに十分な理論的展望を持ち合わせていない点にある。²⁾理論的展望の欠如は、第三世界に属するイスラーム諸国が、独自のイデオロギーに基づく種々の政治的実験を成功させるだけの実践的な力を保持していないこととも関連している。³⁾端的にいうと例えばイラン・イスラーム革命は、革命を成就させこそしたが、それに依拠する建設の段階には一步も入っていない。実践的力と理論的展望を欠いた場合、革命の基礎がためには至難ではないか。

イスラームそのものの命運が疑問視されている状況の中で、イスラーム経済論に関する論議が注目の対象となりにくいのは当然のことである。現在世界で実効性をもっている経済体制は、資本主義と、社会主義のそれである。経済力の立ち遅れたイスラーム諸国が、イスラーム経済の理念に基づく無利子銀行などを設立したとしても、それにはなんらのインパクトもなく、さしあたりいかなる実効性もないであろう。⁴⁾この種の現実感覚でイスラーム諸国の〈無利子銀行〉の実態を調査してみると、予測にたがわずその成果はとりあげて問題視するに足りるものではない。このような事実が、これまでのイスラーム経済論軽視を正当化してきたが、果してこのような態度は正しい地域研究にとり望ましいものといえるであろうか。

現時点での実効性の多寡でしか、主題の重要性を判断しない。したがって例えば無利子銀行の現状のみを付度して、イスラーム的性格の強いグループ、国家がむしろ収益性を無視してまでも、この種の銀行の設立にきわめて強い関心を示す理由、背景はなにかといった問題を看過することは、イスラームないしイスラーム社会の研究においては大変な片手落ちであら

う。さまざまな不透明さを内在させながらも、死んだ価値とされてミイラ同然に取扱われてきたものが、突然蘇生したさいの研究者たちの狼狽ぶりはすでに周知の事柄である。彼らの多くは、イスラームを周囲のどこにでも見かけうる精神宗教の一つと錯覚し、それが特異な経済的イデオロギーを持っていることを知らなかった。⁵⁾もしくは経済的イデオロギーと宗教としてのイスラームとの関連性について、正確な理解を欠いていた。ところでこの場合、一方に関する認識の欠如は、他方に関する、つまりイスラームそのものに関する認識の欠如と通底するものではあるまいか。

タウヒードの世界観に基づく総合的な教え、イスラームにおいては、生活上のあらゆる分野が切子硝子のそれぞれの面のように、たがいに他と関わりをもちながら一つの全体を形成する。そのような構造の中で、イスラーム経済はイスラームという総体の一面でしかないが、他方イスラームはこの側面なしには完結しない。このような特性を考慮に入れば、実効性の多寡でしか主題の重要性を判断しない態度の誤りは明瞭であろう。例えば無利子銀行の収益性のみに眼をむけ、それがよって立つイデオロギー的基盤等はまったく無視する態度の客観性は、地域の実情の把握、その特殊性の解明とは無縁の、擬似客観性にしかすぎないのである。他所の物さしでこの地域を計るというこの種の努力も、その地域が具体的にいかほどの国際的インパクトを持っているか、等々の問題を推量するさいには一定の有用性をもっている。しかしたんにそれだけでは、この地域の特殊性に関する知の開発、認識の精度の向上に少しも貢献するところはあるまい。国際的に依然として強いプレッシャーの下におかれながら、まがりなりにも独自の道を辿り始めた地域の諸問題を検討するにあたり、与えられた諸データを勝手な色眼鏡で眺めているだけでは、地域研究専門家の名にもとることになる。むしろわれわれは、この地域の特殊性の構造解明にむかって、あらゆる知的努力を惜しんではならないのである。

II

すでに指摘したように総合的な教え、イスラームにおいては、それぞれ固有の分野は切子硝子の一つの面のように、たがいに他と関連をもちながら全体を構成している。このような特質は、さしあたり二つの問題点を提供するものであろう。第一は、すでに暗示したように個々の領域が、イスラームという全体の中で切り離しがたい構成要素となっているという点である。そこでは少なくとも理念的なレベルにおいて、例えばイスラーム経済の実現なしにはイスラームは完結しないという、部分と全体の間の緊密な関係性が強く意識されている。⁶⁾この関係性は、イスラームそのもの、あるいはイスラーム経済の内実を問うさいに決して無視されてはならないであろう。イスラームは、宗教儀礼、神学的思想のみで説明しうるものではない。またそれのみで独立したイスラーム経済、あるいは経済論議はなりたたない。この強度な関係性は、民衆のイスラーム意識が進化するにつれて、経済問題をそれのみで切離して論ずることが困難となる趨勢を明示するものであろう。⁷⁾

第一の問題点は、部分と全体の関係に関わるものであったが、第二の点は、全体を構成する各部分間の問題である。各部分のファセットが精密につなが合わされて一つの調和ある全体を構成する切子硝子の容器のように、政治、経済、法律という諸分野は、イスラームにおいてはそれ自体で独立していない。それらは微妙にからみあい、一つの分野が明かす真実は、必然的に他の分野の秘密の解明に積極的な貢献を果さずにはいないであろう。

現在国際大学の中東研究所の若干のグループは、イスラーム経済論に関する基本的文献の研究、紹介の仕事にあたっているが、これは主題であるイスラーム経済理論の基本的輪郭を明らかにすると同時に、この種の議論

が関係する領域の中でいまだに不明な点の多い政治、法律、社会的側面の解明に役立てようという意図をもつものである。

長らくたんなる宗教儀礼、あるいは個人的道德の規範といった領域でしか機能を果さず、さまざまな文化的、伝統的な諸要素にふかく独自のものを刻みこみながらも、実際には社会的な役割をほとんど果さない状態にまでおちこんでいたイスラームが、どのようなかたちで復元されるかという点を予測することはきわめて難しい。この種の予測は、当事者であるイスラーム世界のムスリムたちにとっても困難なことであろう。現在国家的レベルにおいてイスラーム性をもっとも濃厚とみられるイランにおいてすら、数々の試行錯誤、逡巡が見られる実情をみれば、他の諸国における傾向を推測することは至難の業であろう。とりわけ経済の分野は、国家的レベルでの実例をみても、イスラームという根源は一つであっても、サウディアラビア、イラン、リビア等々の場合の相違の大きさを見れば解るように、基本的な枠組の設定の仕方にはかなりの距りがある。

一国がおかれている政治、経済的環境、その国民が志向する体制のいかん等によって、現在イスラーム国家であることを自認する諸国の経済的イデオロギーには、大きな偏差がある。しかし今後イスラーム的経済イデオロギーがそれに基づいて展開されるであろう諸基礎を、すでに観察可能な諸要素を分析、検討することにより、推測、再構成することはまったく不可能ではあるまい。そのためには目的に相応しい、優れたサンプルをとり上げることが必要であろうが、それにあたって重要な指標となるのは、以下の諸点である。(1)その経済理論に十分な法学的裏づけがあるか。(2)他の諸経済イデオロギーとの間の差異が明瞭に特徴づけられているか。(3)それが改良、発展されたさいに十分な実効性をもちうる可能性があるか。

上記の3点を検討したのちに代表的サンプルとして選ばれたのが、すでに物故したイラクのモッラー、ムハンマド・バーキルッ＝サドルの著作である。当代一流の学者の手になる『イスラーム経済論』、『無利子銀行論』

は、上述の3点いずれにてらしてみても合格点にあるといいうるであろう。伝統的法学に通暁した著者の学識は折紙つきであり、議論は厳密な法的解釈にのっとっている。⁸⁾ また彼は、とりわけ『経済論』で資本主義、共産主義を批判しており、イスラーム経済の新たな体系化を行なうにあたり、他のイデオロギーとの相違を明確に指摘している、その理論の実効性に関しては、勿論いまだに多くの問題をかかえてはいるものの、イラン・イスラーム共和国はその経済政策の理論的基礎を彼の著作におくとしているほどの肩の入れようであり、『無利子銀行論』はそれなりにこのシステムの現代への適用の可能性を真剣に模索しているのである。

イスラーム経済の大枠について体系的に論じた『経済論』は、バーキルツ＝サドル弱冠25才の著作といわれ、とりわけマルクス主義、資本主義批判にあてられた部分はいささか物足りぬ感を免れない。⁹⁾ しかしイスラームの経済的イデオロギーを再構成した部分は、勿論完璧とはいえないにせよ、熟考に値する素材を提供している。十二イマーム派に属する著者は、論旨の法的根拠を求めるにあたり、しばしば自派独自の法源からの引用を行なっているが、この著作がサウディアラビアのスニー派の学者たちにとっても経済を論ずるさいの古典とみなされている点は注目に値するであろう。スニー派の学者たちが、宗派の相違をこえて、著者の理論的体系の大枠を了承している事実は、彼の議論が厳密な法的手段にのっとったものであり、イスラームの主張に正しく対応していることの現われであろう。

25才の青年の手になる著作は、細部において荒削りな点が多々みうけられる。寺尾誠氏が指摘するように、ここには「たしかに一貫したイスラーム的経済の理想像が構成されている。しかし同時に経済や社会の現実態を認識し、分析する方法という点でみると、より一層の方法的深化が必要な」¹⁰⁾ことは容易に看取しうるところであろう。事実著者はこの書の中でしばしば、彼がそこで意図しているのは経済理念の確立であり、イスラーム経済がいまだ具体的運用の段階に達していないので、厳密な意味での経済

学的研究は行ないえないと指摘しているのである。¹¹⁾ イスラーム経済学を成立させるためには、まずその理念を経済的施策に実現させうる政治的権力を確立しなければならない。あらゆる分野で完全な自主性を獲得していない第三世界において、いずれの分野に関しても妥当することであるが、一つの部分の厳密化、尖鋭化のためには全体的状況、あるいは少なくとも他の主要な諸部分の活性化が必要である。これらの活性化のためにはまた、当の部分の改善が求められているという具合に、第三世界は恒常的な悪循環の中にある。この種の悪循環を絶ち切ることは永久に不可能なのか。それともなんらかの血路は存在しているのか。

第三世界のすべての民衆と同様に、イスラーム世界においても資本主義的、あるいは社会主義的改革は、先進諸国に追いつくか、あるいはそれらが自らに課す軛からの解放を意図するさいに、他に選択の余地のない方策であった。しかし前者にその可能性がほとんど皆無であり、後者に確たる光明を見出しえない場合にいかなる方策が存在しうるのであろうか。出口なしの状況がもたらす緊迫感、そのような状況にたいする強い自覚は、第三世界の民衆の間に遍在している。それはなんらかの原因を求めて、発火点寸前にあるともいいうるであろう。¹²⁾ この種の状況、そこで働く強力な力のベクトルを正確に把握せぬかぎり、例えば最近のイラン・イスラーム革命の実態は決して理解されえないであろう。

向上、発展のための要請はあるが、その方途は皆無である。このような二律背反の分裂症的状況において、いまだに精緻さを欠いてはいるもののパーキルツ＝サドルの経済理論は、経済分野におけるイスラーム的諸要素の抽出、体系化によって多くの人々の関心をひくものとなった。遅れてやってきた側には、数々の未整備、未完成の点が存在する。しかしなんらかの方途によって悪循環は絶たなければならないのである。そのさいには、よしんば未整理ではあっても、依って立つべき理論的支柱が必要であった。そしてなにはともあれ彼の理論は、イラン・イスラーム共和国の経済政策

の基礎となったのである。

III

イスラーム経済学が可能になる前提としては、イスラームの経済的イデオロギーが具体化される場が存在しなくてはならない。イラン革命が成就した直後に虐殺されたバーキルッ＝サドルは、不幸にして彼の理論が現実化、具体化されるさまを見る機会をもたなかった。他方新生イラン・イスラーム共和国も、イラクとの長年にわたる戦争ゆえに、いまだに効果的な経済政策をほとんどとりえないでいる。このような状況においてわれわれは、今後のイスラーム経済の帰趨はいかなるものか、あるいはそれがいかんにして実効性をかちうるようになるか、といった道筋について検討する必要があるであろう。

理論の尖鋭化、厳密化は、その実践の可能性と裏はらの関係にある。革命後のイランは、早速無利子銀行をはじめ種々のイスラーム的経済政策を推進するというかけ声をあげているが、実際にはいまだに理論化は実践可能なほど十分になされていないのが実情のようである。現在ゴムの高等イスラーム研究所によって、具体的な施策について検討中ということであるが、その詳細は入手不可能である。イランがどのような政策をとるかは興味深い点であるが、ここでわれわれはイスラーム経済復活の可能性の筋道、構造について基本的な分析を行なうべきであろう。経済が経済として独立していないイスラーム的な価値観が支配的な地域で、イスラーム経済が復元されるのはたんに経済的な要因によるのみではない。イスラーム諸国の政治的力が強化され、それにより経済が安定発展するといった段階にまで至っていない状況で、イスラーム経済はその発展、強化のために他の要因を必要としており、また他の諸要因の帰趨と密接に関連している。この側

面に光をあてぬかぎり、イスラーム経済の本性そのもの、あるいはその現状、将来を正しく把握することは不可能であろう。

「イスラーム経済を検討するにあたり、その細部を一々とりあげるといった方法は適切ではない。利子の禁止、私的所有の容認等に関するイスラームの見解の検討といった、全般的構想の中での他の諸部分と切離された個別的研究は有効ではない。またイスラーム経済の総体を、この教えの他の側面、つまり社会的、政治的等の側面から切離し、それらの諸側面がもつ相互関連性を無視して、まったく個別の独立した体系としてとりあげることも当をえていない。」¹³⁾パーキルツ＝サドルは、『経済論』の中で、〈総体の一部としてのイスラーム経済〉という問題を、特に一項をさいて力説している。そして彼は簡単に、以下のような8つの項目をあげて部分と全体の関連について説明する。(1)イスラーム経済と信仰との関連性。(2)イスラーム経済と私的所有、利子等の現実生活に関するイスラームの見解、ならびに種々の事象を解決するさいの固有の方法との関連性。(3)イスラーム経済とイスラームがイスラーム的環境の中で育成する感情、感覚との関連性。(4)経済体制と国家の財政政策との関連性。(5)イスラーム経済とイスラームの政治組織の関連性。(6)利子に基盤をおく資本の撤廃と、税収、一般的相互責任、社会的配分との関連性。(7)イスラーム経済における私的所有に関するある種の規定と、戦争状態におけるムスリムと他の人々との関係を規定するジハードの規定間の関連性。(8)イスラームにおける経済と刑法との関連性。¹⁴⁾

イスラーム経済と他の諸側面の関連については、そのすべてを網羅しえないとする著者が簡単に指摘しているのが以上の諸点である。しかしこれらを管見しただけでもこれが、人間の個人的、社会的生活の総体と関与していることが明らかであろう。これは同時に意図されているイスラーム経済の復活が、実はイスラーム的システムの総体の復活と密接な関わりをもち、むしろその一部にすぎないことを証明するものに他なるまい。現在イ

スラーム的価値への回帰の運動は徐々に、しかし着実に進められつつあるが、それはどの地域をとっても完全なものとはいえない。イスラーム経済にしても状況はまさにそれとパラレルなのである。しかしこの事実、つまりイスラーム経済の復活は、イスラームの再興そのものの流れの一つであるという事実は、同時にその実現の方法、様態が、直接にイスラーム経済の強化だけに由来するものではない点を証すものであろう。イスラーム経済の復活という旗印のもとで企図されているのは、個人的、社会的レベルでの根本的変革、改革なのであり、それは政治的、社会的、文化的変革と密接に関わるものである。この間の事情を、バーキルツ＝サドルは次のように説明している。

「イスラームの教えは、マルクス主義のように自らをたんに科学的な性質をもつものとは考えていない。それはまた資本主義のように、固有の信条的基礎、生活、現実に関する基本的な見解と無縁であるという訳でもない。

イスラーム経済がたんなる学、科学でないと主張するさいのわれわれの真意は、イスラームが経済生活の制度化を求めると同時に、生活の他の側面の治癒をも意図する教えであるという点である。それは政治経済学といったかたちの経済学ではない。換言するならばそれは、墮落した現状の変革のための革命であり、それを正しい状況へと変化させる試みであるといえる。」¹⁵⁾

再三指摘されているように、イスラーム経済とは総体の一部であり、単純に主題別に独立し、ひとり歩きしうるものではない。しかしそれは総体が、つまりイスラーム的システムが再生を求めるとき、その一部として、復権のための強力な挺子となり、変革の一翼を担うのである。イスラーム経済は、それ自体変革の道具、手段であるが、この変革は経済的分野のみの変革に終始するものではない。他面総体的に変革が望まれ、意図されているイスラーム、あるいはイスラーム的システムは、例えば宗教儀礼的側

面の変革、精神的覚醒、鍛練といった事柄だけで決して完結するものではない。それは社会的側面、端的に経済的側面においても正しいイスラーム性を再獲得しなければならないのである。このようなイスラーム経済といの全体的システムとの関わり、〈部分と全体〉としての関連性は、なによりもよくイスラーム経済の現状、その変革の可能性の構造を明かしてくれるであろう。

まずはじめに、外部の観察者の眼に奇異の念を覚えさせずにはいない、〈無利子銀行〉の例をあげてみよう。¹⁶⁾ 利子を基本とする現行の金融体制が世界に強固な地盤を作り、絶大な影響力を誇っている時代に、利子を禁ずるシステムを設立するなどという試みは、時代錯誤であり、まったく非現実的である。イスラーム回帰が時代錯誤で、非現実的であると見なされたのと同様に、無利子銀行の企てが多くの人々に狂気の沙汰と映じていることには、まず疑いの余地があるまい。しかしイスラーム世界の方では、多少の財政的余裕が生ずるとすぐにも、人々はこの種の銀行設立に血道をあげているのである。そこで重要、かつ明確な点は、この種の機関設立の主要な動機が、利潤追究に終始するものではないということであろう。それはむしろ二次的な問題であり、もっとも前面にあるのはイスラームの経済的イデオロギーの実践という意識である。

観察者のもっぱら、現行の無利子銀行の規模がさほど強大ではないこと、その収益性が低いこと、イスラーム世界において今なお通常銀行の取引シェアが大きく、無利子銀行の運用する資金額がいまだに少額であること等を指摘して、胸をなでおろしてきた。しかし観点を変えるならば、この種の観察は部分的切離しの不可能なイスラーム経済を、勝手に主題別に抽出した結果のそれに他ならないのではあるまいか。現時点での実効性は、もちろん判断にあたっての一つの有力な基準である。しかしそれは、対象の論理を少しも付度しない、擬似客観的な基準に他ならないことも明らかであろう。われわれはいま少し、対象そのものの内包するロジックに従っ

て、真実の解明にあたる必要があるのではなかろうか。つまり無利子銀行の企てがもつ、イデオロギー的側面を重視するといった態度が必要なのである。利潤追求を第一義とする、まさに生き馬の眼をぬくような世知辛い現実の中で、資産家たちが率先して金儲け至上主義を棚上げにする。エコノミック・アニマルといわれるわれわれは、この種の変化、相違に、いま少しまともな関心を寄せる必要があるであろう。

無利子銀行設立の企ては、パーキルツ＝サドルの表現を借りれば、〈現状変革のための革命〉の一手段なのである。このイデオロギー的側面について、パーキルツ＝サドルは『無利子銀行論』で次のようにいっている。

「無利子銀行は、そのシステムにおいて、イスラーム精神の高揚のために新たな重責を負う準備をし、その企ての成功のために必要であれば利益のいくばくかを犠牲にし、多少の危険をおかすこともあえて辞さない。なぜならば無利子銀行の設立を企てる者は、イスラーム的価値やイスラーム的精神を内包する新しい理論を世界に提示するからである。」¹⁷⁾

『無利子銀行論』で著者は、有利子金融体制が支配的な現状の中で、発展途上国の財政的ニーズに応えうようなかたちで、これと対抗するイスラーム的金融システムの仔細な模索を行なっている。その詳細はいずれ完訳のかたちで上梓される同書の翻訳にあたっていて他はないが、ここで重要なのは、無利子銀行の設立がイスラームの全体的システム復元のための、一つの強力な武器であるという事実であろう。無利子銀行の存在は、もちろんそれ自体の実効性の強化が要請されているという但し書きが付せられるにせよ、それだけでイスラーム性回復の一つの有力な指標なのである。イスラームという総体回復のための武器として、イデオロギー的な自覚のもとに設立される無利子銀行の存在は、部分としての貢献の証であり、まさにそれゆえに人々の献身的な努力を引き寄せてやまない。

現行の通念にまったく逆らう金融システムの確立のためには、イスラーム経済はいまだ前途に茨の道をひかえている。しかし利子の禁止という強

い障害を前提としながら、まがりなりにもそれに基づく金融機関が着々と成立するということは、その基礎となるものの力強さを如実に証明するものではないであろうか。意図されているのは、トータルな変革なのであり、無利子銀行はそのたんなる一端にしかすぎない。それは革命のための一手段であり、それゆえにこそ収益性などは二次の問題として、それ自体が追究されるのである。

IV

無利子銀行の設立は、部分による全体への貢献の、つまりイスラーム的革命の一つの手段である。明確にこのような認識に立った場合われわれは、無利子銀行ばかりでなく、イスラーム経済そのものの復元の可能性として、その具体的実効性以外にさまざまな要因を見出すことになるであろう。

この穏健で、他人の敵愾心をいまだにそそることのない革命は、着実に、大手をふって進行中である。イランのような急進派だけでなく、サウディアラビアをはじめとする湾岸諸国、スーダン、パキスタン、はてはブルネイまでもが推進する無利子銀行は、比喩的にいうならば秘密の地下活動の段階を通過した、イスラーム的革命の突出した部分であるともいえよう。革命が、ある種のイデオロギーに立脚する当為の具体化、現実化であるとするならば、それは当初、当然のことながら当為と現実との距離をうめる難工事の遂行に悩むことになる。まして先進諸国と第三世界との間に、政治力、技術力、経済力にかなりの格差が歴然と存在するかぎり、この努力は至難のものと認められがちである。領域を例えば政治、技術、経済といったそれぞれの分野に限った場合、可能性はほぼ皆無に近い。またそれこそは進んだ地域が遅れをとった地域にたいしてとる基本的な対応策であっ

た。イスラーム経済が、経済的に弱体なのは当然のことなのである。それを強化するためには、なんらかの権力が必要である。あるいは権力を形成させうる基盤、母胎の組織化が要請されている。だがそれはいかなる権力なのであろうか。

イスラーム世界に現存しているのは、あくまでも二次的な、ローカルな権力にしかすぎない。この権力は、世界的な規模の権力にたいしては、自らを完全に防衛、維持、発展させる能力をもっていない。それはこの地域の近・現代史に明らかなように、多くの内的矛盾を産み出す基本的な原因ともなっている。反植民地運動のさいに、この世界の政治的な力は、まがりなりにも外なる世界と明確に対峙しあっていた。しかし独立達成後の状況は、内なる矛盾が顕在化し、あらゆる面で外なる世界と対抗しえぬ無力を露呈しているのである。獲得された権力は、二次的な権力として外部からたえず強制、拘束の影響をうけ、それが結果として権力者たちの内部への専制をもたらしている。外なる一次的権力の、二次的権力にたいする関わりは、まさにフーコーが定義するような構造をもっているのである。

「そこで行使される権力は、一つの固有性としてではなく、一つの戦略として理解されるべきであり、その権力支配の効果は、一つの〈占有〉に帰せられるべきではなく、素質、操作、戦術、技術、作用などに帰せられるべきである。」¹⁸⁾

政治的独立の獲得によって、イスラーム世界は権力の〈占有〉の状況を払拭した。しかし外部からの戦略としての権力は、依然として確実に機能しつづけているのである。「その権力のうちにわれわれは、所有しうるかもしれぬ一つの特権を読みとるよりむしろ、つねに緊迫し、つねに活動中の諸関連がつくる網目を読み取るべきであり、その権力のモデルとしてわれわれは、ある譲渡取引を行なう契約とか、ある領土を占有する征服を考えるよりむしろ、永久に果てない合戦を考えるべきである。」¹⁹⁾ (傍点筆者)

西欧社会の権力構造を、権力の〈微視的物理学〉の場、装置として解析

したフーコーの『監獄の誕生』の方法は、そのまま中央と周辺、先進諸国と第三世界の関連を捉えるさいにも適用可能であろう。これまでもっぱら〈特権〉、〈占有〉といったタームで解析され、理解されてきたものを、他の枠組で、フーコーの言葉をかりれば諸関連の網目の構造分析で捕え直すこと。第三世界の現状究明のためには、この種の視座の確立が不可欠のように思われるが、一般の理解はもっぱら、あるいは故意に諸関連を一辞一義^{ユニヴォーク}的に把えるだけなのである。これは例えばイスラーム世界の実情を把える上で、基本的な読み違いの原因となるばかりではなく、そこで活動している諸力、とりわけ革命的な力の分析を誤らせるものであろう。

ここ数世紀にわたり世界に吹き荒れた西欧化の嵐は、イスラーム世界にも容赦なく襲いかかった。新たな、異質の価値観、行動様式の侵入により、個人、身体、身振り、行動などのレベルで伝統的なものに慣れ親しんできた民衆は、一種の生体実験を受けることになる。侵蝕作用は着実に進行し、さまざまな領域で新旧システムの交代が行なわれていった。進歩の旗印のもとに暴力的に押しつけられる改造、変更。それは哲学的思考、倫理的概念、法的制度等さまざまな領域の、さまざまな水準で実行された。そしてその公式的、非公式的代理人の役割を、意識的、あるいは強制的に、演じさせられたのは、イスラーム世界の政治的権力者たちである。政治、外交といった顕在的な部分だけではなく、より微視的な細部にまで隠然と介入する異質の要素は、直接、間接に民衆の間に浸透するが、彼らの政府はそれに歯止めをかけることができない。

西欧化が進歩につながりうる歴史的、地理的条件になかった世界の民衆は、政治の領域以外の部分で、新たな権力、もしくはそれを形成させうる基盤を模索し、その組織化を構想した。中東世界で独立運動の昂揚期に追究されたアラブ民族主義は、現在でも決して死に絶えた訳ではない。しかし歴史に根づいていないアラブ意識の掘りおこし、その西欧的発想に依拠する体系化、普遍化は、最終的に人々をそこに結集させうるものではなか

った。²⁰⁾ 共通の言語アラビア語を母国語とする者の文化的連帯というスローガンは、民衆を結束させるに足りるだけの細部の、諸関連の綱目をもってはいなかった。指導者たちの鼓吹するアラブ意識は、あまりに理念的、抽象的であり、民衆の間で息づいているものではなかった。例えばそれは明確な倫理的意識を欠いており、固有の法的なものをもっていない。それは独自の、統合的一貫性を所有するためには多くの欠落する部分を内包していた。なによりも致命的なのは、それが創りあげた主張を民衆が積極的に生き、体験したことがないという点であろう。

固有の価値観、伝統をもつ民衆は、無作為的に任意の、異質の文化を摂取、継承する訳ではない。彼らはそれまで個人、社会が伝統的に織りなしてきた固有の諸関連を生き、経験しているのであり、異質のものがそれとの一定の適応性をもつものでないかぎり、ただちに拒否反応を示す。生体に薬物を注射したり、内臓を移植したりする場合のように。その場合反応を示す主体は、あくまでも生体の側であり、絶対にその逆はありえない。いかなる良薬が投与されたとしても、それを受入れるか、否かを決定するのは前者なのである。イスラーム社会にとっての西欧的価値観は、細部のことはいざ知らず、総量として強い拒否反応をもたらしものであった。第三世界の西欧的近代化に着実に貢献することのなかった西欧の態度は、良薬にたいする忌避の感情を一層つのらせるものであった。イスラーム社会にとっての、とりわけアラブ地域にとってのアラブ意識は、西欧的なものの代替として、たしかに一定の薬効をあげてきた。しかしそれは少なくとも現段階においては、人々をそれほど魅了するものとはなっていない。

現在イスラーム世界の内部で作用している力は、二種類のものに大別されるであろう。それは現実態としての力と、可能態における力である。通常この二つの力は、独立した主権をもち、それが外部の力によって直接的、間接的に抑圧、拘束されていない国家においては、共通のベクトルをもち、相乗的に作用して国力の高揚に貢献する。しかし第三世界、とりわけ

イスラーム世界においては、これはしばしば対立するものとして現われる。現実態の力、つまり顕在的な力の保持者が、いわゆる急進派に属するか、穏健派に属するかによって、それと可能態における力との対立関係の構図は若干相違する。ただしここでは詳細に論じえないが、二つの力のベクトルの対立性は明瞭であろう。²¹⁾

それぞれの力はまた、その力を行行使するための独自の領域、手段をもっている。現実態の力の保持者たちが、国家権力というかたちに集約され、またその名で行使しうるさまざまな権力機構をもち、その網目を統制、統御していることはいうまでもない。しかしその統治の体制、その基盤となるイデオロギー等の道具は、すべての網目に力を浸透させうるほどに強力ではない。統治者の側は、自らの意志を貫徹させるために、余儀なく、もしくは積極的に強制的な力を行行使すが、イスラーム世界、もしくは中東世界の政治的行動の中に専制的、独裁的な色彩が濃厚である理由はここにあるであろう。だが上述のような分析は、まさにそれゆえに、顕在的な力の対項として、それと並置され、それに優るとも劣らない他の力が現存することを暗示してはいないであろうか。

日々生起する政治現象を拾いあげ、その表相を集約、整理してでき上る中東政治日誌、それを適当に味つけしてものされる政治概説、展望といった類は数多い。しかしこの世界の内部でせめぎあう諸力の対立の構造、様相といった基本的な問題を看過して、果して実効性のある研究は可能であろうか。客観的な実相の観察、分析を無視し、外側の評価の基準で、権力の機能を一辞一義的にしか理解しようとししない平板な論議が、ほとんど注意を払おうとしないのは現実の力に対置される可能態の、潜勢的な力²²⁾の存在、その構造と機能である。

中東世界、あるいはイスラーム世界において二重の力の一項を成立させているもの、可能態にある力としていまだ潜勢的でしかないが、すでにその効力を察知せしめるに十分なもの。それをあえて名づけるならば、文化

的な力であると定義しうるであろうか。個人的、社会的なレベルでの諸関連の網目の固有の構造を織りなしているもの、そのような枠組を提供するものとしての文化は、その組織力ゆえにこれらの網目にたいして絶大な統制力を発揮する。個人の身体、身振り、思考、行動、集団的な組成、意志表示、社会的行動等さまざまなレベルで、生活の各領域に根付き、持続される文化的要素は、自らの現状に不満を覚え、それぞれの細部で再活性化を望み、またそのために独自の戦いを挑んでいる。顕在的な力と潜勢的な力の、細部における果てしない合戦。それが現在のイスラーム世界の内部における基本的な戦いの構図である。

一応の政治的独立を達成した国々の内部でこの種の戦いに油を注いでいるもの。それはこの地域の文化的伝統を形成するさいにこの上なく貢献したものの、イスラームの世界観とそれが提供するさまざまな伝統形成因であるというであろう。それはイスラームという教えの宗教的教義に要約されるものではない。

ここで注意しなければならないのは、イスラームという価値体系の統合性と、それが機能するさいの力の発現形態である。イスラームの統合的な性格については、ここで贅言を弄するまでもあるまい。それは宗教であると同時に、政治、経済、法律の基本でもあった。それはまた道徳、文化的意識の核ともなっているのである。例えばイスラーム経済一つをとってみても、それはバーキルツ＝サドルが指摘しているように、信仰、道徳、法、政治等と密接に関連しあっている。この強度な関連性こそは、諸関連の網目がほころび去ったのちにも、民衆に文化的な統合性の残像を意識させるに足りるものであった。

中東世界、あるいはイスラーム世界におけるイスラームへの回帰現象は、すでに衆目の注意を喚起するほどのものとなっているが、これは決してたんなる宗教への回帰を意図するものではない。それはここで文化と名づけたもの、より厳密には諸関連の網目という細部において、固有の活性化を

意図する民衆の蜂起なのである。この生活の各領域に張りめぐらされた網目を起点とする潜在的な力への自覚は、その網目の強度な組織性ゆえに時として潜勢的なものを顕在化させるに十分な力をもっていた。²³⁾ 周到な準備を欠いたイラン・イスラーム革命の異常なほどの爆発力、持続性については、いまだにほとんど説得力のある解説がなされていないが、これは正しい地域研究にとって望ましい事態といえるであろうか。

V

遅れてきた者の潜勢的な力に依拠する自己活性化の試みは、くまなく張りめぐらされた諸関連の網目の占拠、強化を起点としている。これは比喻的にいうならば、単一の領域における主導権の奪取を実現しえぬ者たちの、総力的ゲリラ戦の試みといえるであろう。このような状況の下で例えばイスラーム経済は、いまだに経済的分野のみで他と対抗するに十分な力を持ち合わせていない。いわばそれはいまだに正規の総力戦の段階に到ってはいないのである。事態は無利子銀行の場合も同様であろう。それはそれ自体で完結し、その実効性のみを目的とするものではない。しかしそれにもかかわらず依然としてバーキルツ＝サドルがいうように、「真のイスラーム世界を再建するために先駆的役割を担う」ものである。この表現が意味しているのは、無利子銀行の試みが再三指摘してきた諸関連の網目の占拠、強化の経済的な企てであるということに他なるまい。

クルアーン、ハディースといった法源中の記述を基本とし、伝統的な諸法学者たちの意見を汲み入れながら、イスラーム経済の理論は、実効性の次元、現実態におけるものとしてではないまでも、理念的な次元で、一つのイデオロギーとして連綿と議論され続けてきた。²⁴⁾ この経済思想に関する伝統を考慮に入れずには、イスラーム経済のイデオロギー的意味、その

今後の発現形態に関する正しい認識がえられることは決してないであろう。

イスラーム独自の所有権思想とその諸経済関係との関連は、これまで多くの思想家たちの論議の対象となってきたが、これを三つの基本原理、つまり複合的所有の原理、限られた範囲内での経済的自由の原理、社会的公正の原理を駆使して鮮明な体系化を行なったのが、バーキルッ=サドルの『経済論』である。そこにおいては、例えば労働と資本の関連について以下のような4つの明確な主張がなされている。(1)労働の市場商品性の否定と労働成果の帰属の集中排除。(2)土地の私的所有制限による労働成果の退蔵の排除。(3)貨幣の自己増殖性の否定と退蔵の排除。(4)資本と労働の同質的把握と資本の物質性ゆえの直接的労働への従属。²⁵⁾

バーキルッ=サドルの功績は、これまであまりにも非体系的であったイスラームの経済的主張を、独自のかたちで整備し、そこから固有のイデオロギー的内容を析出していることにある。この独自のスタンスからなされる共産主義、資本主義にたいする批判はいまだに尖鋭さを欠いているが、彼の功績は先に述べたように、自らの主張を明確化した点にある。イデオロギーの明確化、厳密化は、なまじな現実の諸力の回復以上に、可能態における力を鼓吹せずにはいない。例えばイスラーム世界各地における無利子銀行創設の動きは、その端的なあらわれの一つなのである。

所有権の解釈、労働と資本の関係の規定等の重要なイデオロギー的問題に関しては、当然のことながら保守的体制と革新的体制の間では、理解が著しく異なっている。しかもその差異が体制そのものの基盤と直接に関わっているために、これに軽々に言及することは難しい。もちろん利子の禁止の主張も、ある種の体制の利益に基本的に反することもありうる。しかしイスラームの原理に立てば、支配者はこれを非難することは絶対にできないのである。資産家の、資産家による、イスラームのための公然たる活動。このような革命、改革の図式は他の文化圏においてはおよそ不可能なことであろう。現段階において無利子銀行は、いまだに十分な実効性をも

ちえていない。それが整備、充実され、完全な力をもつためには、もちろん経済プロパーの分野における方法論的強化が必要なことはいうまでもない。しかし無利子銀行の企てはイデオロギーとしてのイスラームにおける実践的領域の重要な一部門であり、そのようなものとして経済的成果のみを目的とするものではない。また無利子銀行のこのような性格ゆえに、それはイスラームへの回帰の動きの集中的表現として、他のさまざまな部門、諸関連の網目からエネルギーを吸収することが可能になるのである。真のイスラーム的改革において先駆的役割を担うものと評価されるこのシステムを、たんに現段階における実効性のみで判断する態度は、このような意味で少しも客観的とはみなされえないであろう。対象のもつ固有の論理に従って論議を行なうために、われわれはいま少しその本性、構造、機能、その発現形態等について、対象に即した検討、分析を行なわねばならぬように思われる。

〈本稿は、昭和60～63年度文部省科学研究費助成金・一般研究(A)による「現代イスラーム社会の変容の総合的研究——思想的背景と現状」の研究成果の一部である。〉

注

- 1) イスラームを後向きに論じている研究は数多い。このような態度に関する批判としては、例えば *Orientalism*, by E. Said, London, Routledge & Kegan Paul, 1978 参照。

オリエンタリストの研究の擬似客観性にたいする指摘としては、例えば *L'Idéologie Arabe Contemporaine*, par A. Laroui, Paris, Francois Maspero, 1982 p.p.5-7

- 2) 計画の不備については指摘が多い。例えば *The Arab Economy*, by Y.A.Sayigh,

London, Oxford Univ. Press, 1982, p.66

- 3) この点については、1955年のバンドン会議出席者 Mālik ben Nabī の、当時の問題性の分析が現在でも基本的に通用するほどである。
- 4) ただしイスラーム世界においては、研究は著しく盛んになっている。文献紹介も兼ねて便利なのは、*Studies in Islamic Economics*, ed. by K.Ahmad London. The Islamic Foundation, 1980
- 5) これまで日本では、もっぱらその実効性を論じたイスラーム経済研究論しかなかった。この点を補うために58～59年度科学研究費補助金をえて、国際大学中東地域研究科は下記の翻訳、研究論文集を刊行した。

M.バーキルッ=サドル著『イスラーム経済論』第1巻、第2巻、黒田壽郎訳。

『イスラーム経済論をめぐって』黒田壽郎編。

これは *'Iqtisādā*, by M.Bāqir-ṣ-Ṣadr Beirut, Dār-t-Ta'āruḥ li-l-Maṭbū'āt, 1980の部分訳とその紹介、研究である。

なお現在、同じ著者による *al-Bank al-lā-ribawī fi-l-'Islām* が、「イスラーム無利子銀行論」として、岩井聡研究員の手により翻訳中である。

以下前者は『イスラーム経済論』、後者は『無利子銀行論』と略述する。

ちなみに本書の内容は、社会構造、政体論を取扱うさいにも重要な問題を含んでいる。

- 6) 『イスラーム経済論』第1巻、第1章、2節 参照。
- 7) イスラーム経済復活の動機そのものが、純粋に経済的なものではなく、むしろイデオロギー的なものである点は明らかであろう。

Muslim Economic Thinking, by M.N.Siddiqi, London, The Islamic Foundation, 1980, p. 4

- 8) 伝統主義者たちの法的正当性の追究は、現在のところ彼らの経済理論を実行不可能な方向へと向かわせている。しかしそれこそが、経済的イデオロギーとしての力を創出する部分を形成していることも忘れてはならない。
- 9) 『イスラーム経済論』の前半約300頁を含むこの部分の内容については、別の機会に詳述する。
- 10) 寺尾誠「バーキルッ=サドル『イスラーム経済論』へのコメント」、『イスラーム経済論をめぐって』、国際大学中東地域研究科 1985年 82頁。
- 11) 『イスラーム経済論』第1巻 第1章 4節参照。
- 12) この種の第三世界の精神的状況を活写した研究としては、*A New Trend in the*

Realm of Arab Thought, by T. Shirakawa 参照。本論文は国際大学中東研究所 Working Paper Series No.4 として刊行された。

- 13) 「イスラーム経済論」第1巻, 16頁。
- 14) 同上 19~24頁。
- 15) 同上 37頁。
- 16) *A New Approach to Human Economics : A Case Study of an Islamic Economy*, by S. Iwai, Working Paper Series No.2, The Institute of Middle Eastern Studies, International Univ. of Japan, 1985, Chap. IV, Part II 参照。
- 17) 『無利子銀行論』13頁。
- 18) *Surveiller et Punir - Naissance de la Prison, par M. Foucault*, 『監獄の誕生』田村俶訳 新潮社, 1977年 30頁。
- 19) 同上 31頁
- 20) 例えば '*Urubah and Religion*', by I.R.A. al-Farūqī, Amsterdam, Djambatan, 1962, p. 144
- 21) 上述のフーコーの表現は、イスラーム世界の諸国と外国からの政治的圧力との関係ばかりでなく、イスラーム世界内での支配者と被支配者の関係にも妥当する。
- 22) イスラーム世界における潜勢的な力の網目を作りあげている重要な要素は、いうまでもなく文化的核としてのイスラームである。その構造、機能は、フーコーの権力論を裏がえしにすればもっと良く説明されうるようなものではあるまいか。
- 23) 拙稿「イスラム・パワーとしてのイスラム」, 『イスラム・パワー』中東調査会編, 第三書館, 1984年 参照
- 24) 黒田美代子「イスラーム経済の基本構造」『中央大学企業研究所年報』第5号, 1984年 205~206頁。
- 25) 白川勉「イスラーム経済思想における〈所有〉と〈連続性〉に関する考察」, 『イスラーム経済論をめぐって』64頁。

Islamic Economy and its Cultural Background

by Toshio KURODA

Recently many symptoms which indicate a people's "return to Islam" can be found in different sectors of the Islamic world. The various attempts to establish an Islamic economic system are counted as one of these symptoms. Until now Islamic countries in the midst of the modern capitalistic system have not been able to achieve any significant results concerning the restoration or establishment of an Islamic economic system. Non-interest banks, which had been expected to play a pioneering role in the Islamization of the economic system, are yet in the formative stage and do not have positive financial power. However, it is natural that the Islamic world, having belonged to the Third World, has not been able to possess full command in any field, since this region could not shake off the yoke of the developed countries completely. The same can be said of the present status of non-interest banks.

It is without doubt useful for outside observers to analyse the Islamic economy in terms of its present economic power and efficacy, but if we pay attention only to matters such as this, disregarding its nature as a part of Islamic ideology, the analysis will fall short of the work.

This essay attempts first to clarify the ideological meaning of

Islamic economy and then to analyse its function and the mechanism for its revival, basing the analysis mainly on some major works of the late M. B. Şadr.

In the Middle East, Islam, not as a pure religion but as a traditional cultural strength, occupies many aspects of the networks of relations, and on this basis it is regaining self-assertive power even in the political arena. In the region where the relationship between the political authorities and these networks of relations is antagonistic, Muslims can expect to regain their real power by occupying as many parts of these networks as possible. In such a situation, Islamic economy cannot be treated as something purely economic, since it does not aim solely at economic success. The analysis of Islamic economy as an integral part of ideology and one of the means for the restoration of the Islamic world will not only clarify more objectively the present status of Islamic economy, but also the very nature of Islamic ideology itself.